ライバルの意味とは何か

豊田則成[1)]　植田　実[1)]

What is the Meaning of the Rivalry among Former Top Athletes?

Norishige TOYODA　Minoru UEDA

Abstract

Using the qualitative research method and discourse analysis, the purpose of this study was to identify the meaning of rivalry among former top athletes. According to the Research Question (RQ), "What is the meaning of rivalry among former top athletes?", data was collected using one-on-one and one-on-two semi-structured interviews. Based on the results of the discourse analysis, the suggestions were as follows : (1) the relationship between the rivals was narrated based on their dependence on each other ; (2) the recognition of a rival was based not only on their interactions but also on one-side cognition ; (3) psychological distancing themselves brings about the improvement of self ; and (4) the relationship evolved from competing with each other to supporting each other. These were hypothetical ideas which recognize the psychological relationship among rivals.

Key words : Rival, Discourse Analysis, Research Question, Semi-structured, Interview, Hypothetical idea

1）競技スポーツ学科

はじめに

アスリートたちのライバル物語は，多くの叡智を世に伝えてきた（村松友視，2005）。例えば，シンクロナイズドスイミング（デュエット）で，1988年にソウル五輪銅メダルを獲得した田中ウルヴェ京氏は，あるインタビューに対し，次のように応えている。

【記　者】ソウル五輪のパートナーだった小谷実可子さんと常に比較されてきましたね？

【田中氏】彼女がいなければメダルは取れなかっただろうし，感謝しています。現役時代はいつも比べられていると相対評価ばかり気にしていました。でも，心理学を身につけて執着は他人ではなく自分にするべきだと…。すべてが変わりました。

（2008年３月８日朝日新聞土曜版「Be」から）

このような記事は様々な角度からの解釈が可能であることは言うまでもない。例えば，田中氏と小谷氏の関係に着目すると，両者はデュエットのパートナーでありながらライバルでもあったと読み取ることもできる。そこでは，「アスリートにとってライバルとは，どのような意味があるのか」といった素朴な疑問に対峙することになる。本研究は，この素朴な疑問の解決を目指している。

そもそも，アスリートにとってライバル（rival）は，競技生活を充実させるために「なくてはならないひと」（necessary person）として語られる。ライバルは自己と比肩する存在であり，その関係性は特定の両者によってのみ成立するといった特徴を有している。このような固有の関係性（relationship）は，アスリートとしてのアイデンティティを形成する上で大きな意味を持っているに相違ない。このアスリートとしてのアイデンティティ形成が，セカンドキャリア構築と密接に関連していることは想像に難くない（吉田，2006）。そして，アスリートがライバル関係の中でどのような心理的成熟を遂げていくのかは，非常に興味深いトピックでもある（豊田，2007a）。

また，前掲のインタビューの中で，田中氏は次のようにも語っている。

【記　者】銅メダルを獲得してからちょうど20年がたちました…

【田中氏】あっという間に駆け抜けましたね。メダリストの自分に勝とう，それ以上の目標を見出して達成しようと，必死にもがき努力してきた日々でした。

（2008年３月８日朝日新聞土曜版「Be」から）

「20年」が「あっという間」と語る田中氏の心情はいかばかりか。「必死にもがき努力してきた日々」とは，どのような生活だったのだろうか。そこには，アスリートがアスリートでなくなることの意味を垣間見ることができるのかもしれない。

豊田（2007b）は，これまでアスリートのキャリアトランジション問題に，アイデンティティ再体制化の観点からアプローチしてきた。その中で，アスリートを生涯発達の観点から捉えることを強調し，プレ・トランジション（競技生活）の過ごし方が，ポスト・トランジション（引退後の生活）の在り方に影響することを訴えた。このような立場からすれば，プレ・トランジションから体験する「ライバル関係」から，アスリートはポスト・トランジションに活かせる「何か」を獲得していることになる。

ちなみに，これまでになされたライバル研究は極めて少ない。そのような状況の中，太田（2007）は興味深い知見を導き出している。そもそも，「ライバル関係」とは単なる競争

（competition）ではなく協働（partnership）でもあり，両者の間では関係性の向上が期待できると示唆した。加えて，比肩する重要な他者の存在はやる気や向上心をもたらし，動機づけの機能を果たすことを導き出している。すなわち，ライバルに対する対人認知は良好で，競争を「競い合う」だけではなく「高め合う」手段として認知され，活用されている。また，Fung（1992）は，スポーツにおける競争関係に影響する動機づけは，予てより，勝つ（win）ことよりも達成（achievement）に起因するとした。このように，自己目的的な達成行動への寄与を特徴とする「ライバル関係」は，特定の両者による独特な関係性であって，アスリートとしてのアイデンティティ形成を理解する上で，有益な基礎資料となり得ると考えられる。

ところで，本研究は，ディスコース分析（鈴木，2007）を中心的な分析方法として参考とした。そのディスコース分析の手続きは，①方法の背景となる資料と調べたいトピックに関する資料を読み込む，②さらに関連すると考えられる資料を読み込む，③調べたいタイプの資料を決定する，④データを集める，⑤会話データを録音する，⑥その録音した音声を聴く，⑦トランスクリプトを作る，⑧トランスクリプトを録音した音声でチェックする，⑨トランスクリプトを読み込む，⑩読み込んでいく中で，特徴的な，興味深い点を探し出す，⑪テーマに関する特徴と，ディスコースに関する特徴についてそれぞれ索引を作る，⑫反証例を意識しながら読み込んでいく，⑬予備的な分析を始める，⑭分析の草稿を書いては書き直し，反証例に注目する，⑮納得するまで継続的に分析―執筆のサイクルを繰り返す，⑯必要であればいつでも①へ戻る，といった16段階とされる（Billig，1998）。このような自覚的に反芻する手続きを推し進めていくことで，有益な仮説的知見を導き出すことを目指すのである。これらを参考に，本研究は次のような分析プロセスに集約をした。それは，①インタビュー，②逐語化，③トランスクリプトの作成，④トピックの抽出，⑤発話内容の分析，⑥仮説的知見の同定，である（豊田・松田，2003）。

また，本研究は仮説検証ではなく，仮説生成の立場を採る。本研究の分析対象となったのは，かつて日本を代表する元トップアスリートであり，その競技生活から引退後の現在に至るまで自己の内外において多くの共有体験を有し，それ故に，独特の関係性を有していた。そのような両者がお互いを「ライバル」として語るとき，両者によってのみ成立する関係性が，どのようにして形成されていくのかを知ることになり，彼らにとってのライバルの意味を明らかにすることにもつながる。

このような背景から，本研究は，いわゆる質的研究の範疇にあるといってよい（萱間，2007）。すなわち，分析対象者のライバルに関連する特徴的な語りに着目し，分析者が解釈することによっていくつかの仮説的知見を導き出し，その相互関係を検討することを通じて，彼らがライバルをどのように意味づけているのかを検討していく（杉浦，2004）。

そこで，本研究では，「アスリートにとってライバルとは，どのような意味があるのか」というリサーチ・クエスチョンを設定し，以下のような質的な検討を行った。

方　法

1．インフォーマントと調査時期

本研究のインタビュー調査の対象者となったインフォーマント（Informant：情報提供者。以降，Inf.と略す）は2名（Inf. AとInf. B）であり，調査時期は，2006年7月から11月であった。

2．調査方法と調査内容

①インタビュー：1対1形式の半構造化インタビューを実施した。1回のインタビューはおよそ1時間程度。各3回程度実施した。また，上記のインタビューを補足するために，

１（インタビュアー：著者）対２（Inf. A・Inf. B）形式の半構造化インタビューを１回実施した。

②ライフライン：３者インタビューの際に，自分史を振り返る形で実施した。これまでに経験したエピソードをいくつか取り上げてもらい，自分にとって肯定的もしくは否定的な出来事なのかに配慮しつつ配置し，各エピソードを実線で結ぶよう求めた。詳細は，河村（2000）を参照のこと。

３．インタビュー調査が成立した背景

Inf. Aに対して転機に関するインタビュー調査を依頼し，快諾を得た後，インタビュー調査を開始した。その語りの中でInf. Bの存在を確認する。分析を進めていく中で，Inf. Aの内面の理解を深めていくためには「ライバル」と称するInf. Bの存在を詳しく分析する必要があると判断した。そして，Inf. Aの紹介でInf. Bのインタビュー調査を実施するに至った。

結果と討議

ここでは，１）Inf.の概略，２）エピソードの抽出，３）エピソードにみる発話，の３点から仮説的知見を導き出す。

１）Inf.の概略

Inf. AとInf. Bは生年月日が全く同じの40歳代の男性である。いずれも，ある競技種目の日本代表監督を歴任している。

生まれ育った土地が同じであることから，両者は多くの共有体験を持つ。小学校４年生から同じ野球の少年団に属し，両者は，中学時に今の競技を始めている。

特に，Inf. Bは中学２年時に全国優勝を果たし，著しい活躍を遂げていった。そして，両者は全国的に有名な強豪校に入学を果たす。この頃，稀有な活躍を遂げていくInf. Bに対して，Inf. Aはライバル意識を強めていったようである。この頃から両者は，競技への取り組みを強化していったといえるだろう。

大学進学はそれぞれの想いから，Inf. Aは有名国立大学へ進み，Inf. Bは海外留学ののち国内有名私立大学へと進む。Inf. Aはトップレベルでの練習環境を獲得することに骨を折る一方，Inf. Bは帰国後に日本選手権優勝を果たした。周知のごとく日本の第一人者としての歩みを着実に進めていった。一方，Inf. AもInf. Bと一緒に練習をするなど，両者は歩みを同調しながら各自の実力を向上させていったようである。

大学卒業後はInf. Aはアマチュア，Inf. Bはプロへと進む。その後，Inf. Bが日本代表監督に就任した際，Inf. Aはコーチの依頼を受けることになった。そして，Inf. Bが退任後には，Inf. Aが日本代表監督を務めることになり，今日に至っている。

２）エピソードの抽出

Figure 1とTable 1にInf. Aのライフラインを，Figure 2とTable 2にInf. Bのライフラインを提示した。ここでは，両者のライフラインについての語りに共通する４つのトピックに着目した。それは，「両者の出合い：野球少年時代」，「競技との出合い：草魂Aと王者B」，「それぞれの歩み：アマチュアAとプロB」，「再び相見える：日本のトップスタッフとして」，である。次では，これらのトピックごとに発話を分析することにした。

３）４つのエピソードにみる発話

先にも示したが，１対１形式の半構造化インタビューの結果を参考として４つのエピソードに着目した。以下では，それぞれのトピックにおける両者の「ライバル関係」についての発話（インタビュー資料）を示した。また，アンダーラインにIDナンバーを付し，討議の目安とした。ちなみに，「…」は発話の間合いを表現している。

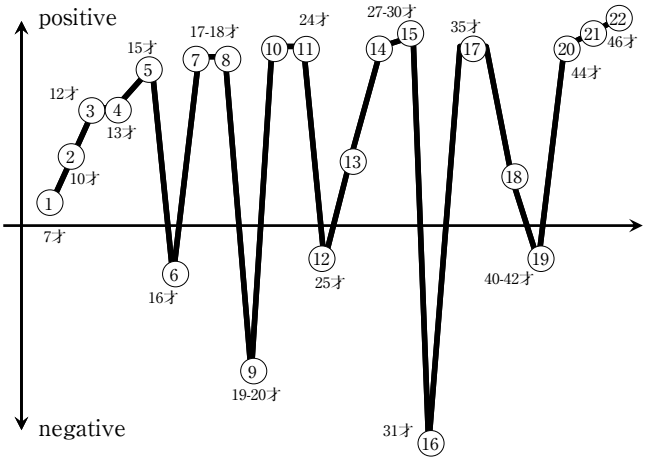

Figure 1：Inf. A のライフライン

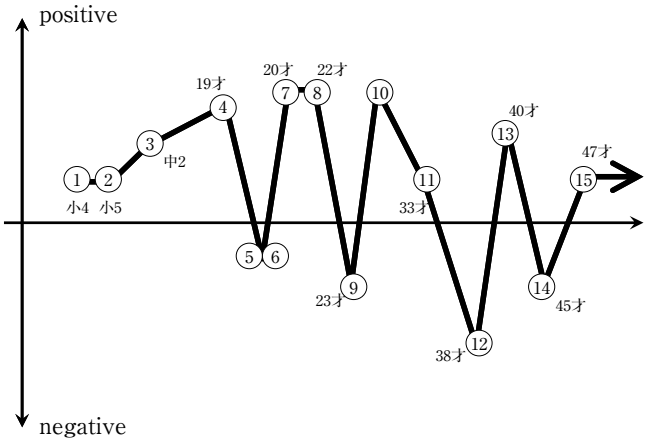

Figure 2：Inf. B のライフライン

Table 1：Inf. A のライフイベント

No.	年 齢	ライフイベント
1	7才	小学校入学
2	10才	野球部入部
3	12才	区内大会優勝
4	13才	競技種目に出合う
5	15才	○○高校入学
6	16才	IHメンバーになれず
7	17才	IH優勝
8	18才	□□大学入学
9	19才	Inf. Bが海外留学へ　練習環境に悩む
10	20才	Inf. Bの帰国　練習環境の充実
11	24才	△△会社へ入社
12	25才	会社と選手の両立に悩む
13	26才	海外遠征で世界を見る
14	27才	日本リーグが始まりナンバーワンに
15	30才	愛娘の誕生
16	31才	愛娘の死去
17	35才	Inf. B監督の下，日本代表コーチに就任
18	40才	マンネリを感じ，退社を決意
19	43才	△△会社の部が廃部
20	44才	海外留学で意識向上
21	45才	日本代表監督就任
22	46才	現職に就く

Table 2：Inf. B のライフイベント

No.	年 齢	ライフイベント
1	小4	野球部入部
2	小5	競技種目を開始
3	中2	全国大会優勝
4	19才	留学を決める
5	19才	留学の現実
6	20才	留学断念・帰国
7	20才	全日本優勝
8	22才	プロ入り
9	23才	プロ直後，勝利できず
10	24才	プロ成績順調
11	33才	日本代表監督就任
12	38才	監督として好成績を残せず辞任
13	40才	指導者として全国展開を始める
14	45才	将来のこと（仕事）で悩む
15	47才	自分に出来ることをすると決心

両者の出合い：野球少年時代

ここでは，両者が初めて出会った頃のトピックに触れ，小学校４年生の時に野球部の入部テストにそろって合格したことを中心に発話がなされている。以下に発話内容を示す。

Inf. A：「我々バッテリーも組んでいたこともある…僕はキャッチャーでBはピッチャーを…あとから考えると…自分が好きなスポーツを選んだ時には，いつもBが側にいた…嫌味かなって思うくらい僕よりも何でもできた…勉強もできたし，当然野球もできるとB自身も思ってた…そして，また，それを見せつける…僕もできると思ってたけど，正直Bの方ができると感じてた…(1)」

Inf. B：「同じ小学校だったけどクラスが別だったので…Aという存在は知っていた…４年生になって…野球部にも一緒に合格して…当時，４年生で入れたのはAとBだけ…二人ともすぐにレギュラー…Aはセカンドで僕はサードだった…Aは人をまとめていく能力があった…キャプテンもやってたね…僕はもう自分のやりたいことだけやってたら満足するタイプ…Aは男気があって頼れる感じ…(2)」

特に，上記の＿(1)と＿(2)に着目すると，ライバルとの出合いを語る時，相手のことを理解するが故に，自己理解を深めているといった「相互理解」を読み取れた。このことから，彼らは「ライバルを知ることで，己を知る」といった内的な体験を共有していることが確認できる。

競技との出合い：草魂Aと王者B

ここでは，競技に取り組み始めた頃のトピックに触れ，それぞれ競技へ傾倒していくプロセスを中心に発話がなされている。以下に発話内容を示す。

Inf. A：「全国大会に行きたいと明確に思ったのは…やはり一緒に野球をやっていたBがなんでこんなにできるのっていう素朴な競争心からだった…Bは必ず１番をとってくる…そうすると気持ちがメラメラしてくる…でも勝てない…進学も同じ高校…Bは１年の４月からナンバー１…僕はずっとボール拾い…ある日，Bのパートナーとして組めと監督から言われて…僕はまだレギュラーにもなってなかった…Bは既に日本一…このペアで負けたら僕の責任…優勝したらやはりBが凄いなってことに…辛くもあり，後がない状態でした…でも，それが自分の力を知る良いきっかけになった…時にBが負ければいいのにと思った…それは自分が強くならない妬み(3)…でもBは勝ち続ける…そのうちBのことを応援する気持ちに…その時，Bには勝てないかもしれないなって思った…僕は優勝には縁がないと思う時期もあった…常にBが上にいたから…目標だったね…」

Inf. B：「小学５年から種目を始めた…Aよりも半年くらい早く始めた…中学２年で全国大会優勝して，僕はそこからずっと全国大会では負けなし…Aはライバルというか…兄弟みたいな存在で…高校の時はAは常に隣にいました…彼といると話をしなくても済む…他の人といると気を使って話さなきゃって思うけど…その必要がないから…それがいまだにある…僕にとっては，空気みたいな存在…(4)」

特に，上記の＿(3)と＿(4)に着目すると，「競い合う」関係の中で，Inf. AはInf. Bに対して妬みめいた感情を抱く一方，Inf. BはInf. Aに対して信頼を深めており，両者の相互理解にズレが生じていることを読み取ることができる。すなわち，Inf. AはInf. Bを「競い合う相手」として強く認知している一方で，Inf. BはInf. Aを「高め合う相手」として認

知していることが読み取れる。これらのことから，ライバル関係にある両者のライバル認知の程度は，双方が同等であるとは限らず，どちらか一方が強固であることもあるということになる。

それぞれの歩み：アマチュアＡとプロＢ

ここでは，競技への傾倒の仕方に相違がみられるようになり，アマチュアとプロ，それぞれが違った立場から競技への取り組みを強化していったことを中心に発話がなされている。以下に発話内容を示す。

Inf. A：「いつかはこれ（競技）で飯を食いたいという気持ちもあった…でも，大学には練習する場所があっても相手がいない…Bが留学先で新しい環境で一生懸命取り組んでいる写真が送られてきたりすると…落ち込んだ…でも，Bが帰国すると，また競技に打ち込むようになった…就職も競技の続けられる会社に入って…アマチュアで頑張っていつかプロになりたいとずっと思ってた…30代半ばになって，とうとう自分の人生は（プロに）踏み出せずに終わるのかなって思っていたら突然廃部に…それをきっかけに僕は海外に出かけるようになった…少しBに近づけた感じがした…自分の人生の真ん中に競技を置きながら考えると，海外での経験は，僕の競技人生のみならず人生観までも変えてくれた…人との関わりや競技との関わり…価値観を変えてくれたかな…(5)」

Inf. B：「留学して挫折して…勉強がついていけなくて…でも日本に帰ってきたらにインカレ優勝して全日本選手権も優勝できて…それで，プロになった…プロになった直後は，全然試合に勝てなくて落ち込みました…Aは同じプロの世界に来なかったので，一時試合をすることもなかった…でも，プロとアマ，一緒になって練習もした…Aに対する競争心はあったけれど，それだけじゃ勝てない…Aを乗り越えても，また新たな競争相手が出てくる…それだと，自分のプレイが，何か変になってしまう…自分の中の自分と闘うことが大事…(6)」

特に，上記の＿(5)と＿(6)に着目すると，アマチュアとプロといった取り組み方の相違により客観的な相互理解が促されていることがうかがえる。さらには，相手のことを客観的に理解することに伴って自己の理解が深まっていったと読み取ることができる。すなわち，ここでは，客観的な相互理解が自己の価値観の拡大・深化へとつながっていったことが確認できる。

再び相見える：日本のトップスタッフとして

ここでは，それぞれが違った立場から競技へ取り組んできたのが，再び日本のトップスタッフとして体験を共有するに至ったことを中心に発話がなされている。以下に発話内容を示す。

Inf. A：「僕の選手としては先が見えて…コーチに興味が出てきた30半ばになって…ひょっとしたらBが（日本代表）監督になるかもしれない…その時…ひょっとして…もし手伝ってくれという時があるかもしれない…その時，断らないで「わかった」って言えるような自分でいたいなって思った…なんかBの力になってやりたいなって…それが目標だった(7)…それで実際にそうなってコーチを引き受けた…でも成績が振るわない…崖っぷちで臨んだ試合でたまたま奇跡の大勝利をおさめた…その時は無意識にBのことを肩車して…そのまま試合会場を一周した…」

Inf. B：「結構騒がれました…日本チャンピオンが監督になったぞって…その上，成績が散々で…結局，更迭されて…実は…監督

になる前から既にAにコーチを頼もうと決めていた…Aは結構，周りの人からに認められているし(8)…それに比べて俺は…まだ指導ばかりで肉体労働ばかりしている…周りは会社ではもう中堅クラス…責任ある立場にある…俺は身体が動かなくなったら終わりかなって…ちょっと悩んだことがあったけど…いやいや，自分にできることをやっていこう，それが自分の使命だからと思い始めた…Aはいつも近くにいる感じがする…Aには社会的にもっと活躍してほしいと思う…(9)」

特に，上記の＿(7)，＿(8)と＿(9)に着目すると，ライバル関係にある両者が，互いに「競い合う」関係から「高め合う」関係へと発展させているばかりでなく，「支え合う」関係へと発展させていることが確認できる。

このように，本研究では，４つのトピックに関連する語りに着目することによって次のような仮説的知見を導き出すに至った。すなわち，ライバルは「競い合う」→「高め合う」→「支え合う」といった関係性の変化に伴って，相手と自己に対する相互理解が促され，一旦，その相互理解にズレが生じるが故に，自己の価値観を拡大・深化していくといった心理的成熟のプロセスを経ていくことが確認された（Figure 3）。

まとめ

本研究は，ライバル関係にある両者の発話を質的に検討することで，以下のような仮説的知見を導き出した。彼らは，Ⅰ．ライバルとの出合いを相互理解の深化として共有し，Ⅱ．「競い合う」関係の中で，ライバルとしての認知は，双方向というよりは一方向となることもあり，Ⅲ．客観的な相互理解によって，自己の価値観を拡大・深化させ，Ⅳ．お互いに「高め合う」ばかりでなく「支え合う」へとその関係性を変化させていた。

また，両者は，まさに「なくてはならないひと」として，相手を熟知し，相手に熟知されていた。このことは，両者の相互信頼に根付いている。特に，Inf. AはInf. Bを「常に上にいて，目標となる存在」とし，Inf. BはInf. Aを「兄弟みたいで，空気みたいな存在」としており，両者のライバル認知にズレが生じていることを意味している。

これらのことから，本研究で設定した「アスリートにとってライバルとは，どのような意味があるのか」というリサーチ・クエスチョンに対して，「アスリートにとってライバルとは，【競い合う】→【高め合う】→【支え合う】といった関係性の変化を伴い，【相互信頼】→【相互理解のズレ】→【価値観の拡大・深化】といった心理的成熟を遂げていくものとして語られる」といったひとつの仮説的知見を導き出すことができた。

また，本研究を振り返ると，次のような点を考慮しなければならないことに気付く。まず，本研究の調査対象は男性のみであり，関係性発達（岡本，1995）の立場から鑑みると，

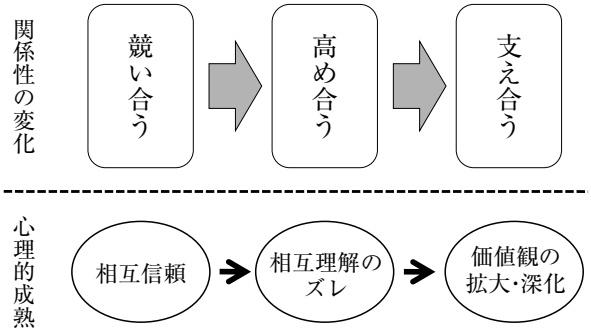

Figure 3：ライバル関係に伴う心理的成熟プロセス

本研究の成果は，いわば男性に限られたものとみなさざるを得ない。従って，今後，調査対象を女性アスリートへと拡大する必要があろう。

次に，本研究から導き出された仮説的知見の「妥当性」を検討する必要があるが，ただし，質的研究でよく議論されるのは，「妥当性」というよりは「妥当化」の問題である（フリック，1995）。本研究で得られた知見は，今後，発展的な研究作業によって一層妥当性を帯びていかねばならない。そういった意味で，今後も研究成果の妥当化に取り組まねばならない。

最後に，本論では，特定の両者によってのみ成立する「関係性」に着目し，アスリートの心理的成熟のプロセスを質的に検討した。このような成果を如何にしてスポーツフィールドにフィードバックしていくのかについては，更に慎重な議論を重ねていく必要がある。今後も研究継続の中で具体策を講じていきたい。

質的研究の醍醐味は，個人に密着し，関与し，傾聴する中から得られる一回性の高い「語り」を分析の対象として獲得していくことにある。いわば，「語り」は「生もの」であり，時々刻々と変化していく人間の心をリアリティとしてとらえていく企てである。著者は，このような取り組みをもって，更に，「アスリートがアスリートであることの意味とは何か」，はたまた，「アスリートがアスリートでなくなることの意味とは何か」と，素朴な問いを立て続けたいと考えている。

引用文献

Billig, M　1998　“Rhetorical and discursive analysis：How families talk about the royal family”. In N. Hayes（ed.）Doing qualitative analysis in psychology. Hive Psychology Press, 39-54.

Flick, U.　1995　Qualitative forschung，Reinbek bei Hamburg：Rowohlt Verlag.（フリック U. 2002　質的研究法入門　小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）春秋社.）

Fung, L　1992　Participation motive in competitive sports：A cross-cultural comparison. Adapted Physical Activity Quarterly, 9, 114-122.

河村茂雄　2000　心のライフライン―気づかなかった自分を発見する　誠信書房.

萱間真美　2007　質的研究実践ノート　医学書院.

村松友視　2005　ライバルを探せ―対立構造のすすめ―　日本放送出版協会.

岡本祐子　1995　成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について，広島大学教育学部紀要（第二部），44：145-154.

太田伸幸　2007　ライバル関係の心理学　ナカニシヤ出版.

杉浦健　2004　転機の経験を通したスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究　スポーツ心理学研究，31：23-34.

鈴木聡志　2007　会話分析・ディスコース分析　新曜社.

豊田則成・松田保　2003　元トップアスリートの転機についての語り　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　創刊号　117-131.

豊田則成　2007a「ライバル」の意味とは何か？　日本スポーツ心理学会第34回大会研究発表抄録集　p.176-177.

豊田則成　2007b　アスリートが語る人生の物語　現代経営学研究所紀要（神戸大学大学院経営学研究科）第15巻４号　22-35.

吉田毅　2006　アスリートのキャリア問題　菊幸一ほか（編）『現代スポーツのパースペクティブ』大修館書店　210-227.

付記：本研究は，平成16-18年度　文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））アスリートの「転機」に関する研究　自己物語的アプローチから〈課題番号16700476〉の一環として実施された。